

テーマ

木造船、造りませんか

適用
分野

博物館と文化行政、船祭りや
観光舟運の活性化、地域文化の
再生と創造



研究
名称

日本の木造船を活かす一手仕事の再興

氏名
所属

出口晶子 教授
文学部 歴史文化学科

内容

●特徴

列島と海域アジアの木造船の現在、そして未来へ

●研究内容

わたしは日本列島と海域アジアの木造船、ことに丸木舟などの研究者です。対象は、近現代に生きて使われてきたもので、ここでいう丸木舟とは、一木を割りぬいた単材のものだけでなく、前後、左右、上下に材を継いだ複材化した多様な丸木舟を指します。その造船・操船技術には顕著な地域的特色がみられ、列島では木造船の終焉期にあたる現代まで「丸木舟文化」が引き継がれてきました。これは世界でも特色ある木造船文化となっています。近年はこうした研究を背景に古代や中世の出土船の鑑識もしています。そして、喫緊の課題は木造船の手仕事を次代に継承することです。

全国の船大工は推定総数でせいぜい600人程度、このうち木造船を造れる人は半数、昭和一桁生まれの方がほとんどです。あと数年でその人数は「トキ」並になります。船大工がいなくなるということは、関連する手仕事群、その道具や知識群、地域文化の

消失を意味します。一旦途絶えるとその再興は容易ではありません。

「どうです？木造船を造りませんか」近頃は機会あるごとにそう連呼しています。博物館に保存するのもいいが、堀や水郷、都市の湾岸を舟運観光するために試行・復活するのもいい。ペーロンなどの船祭りや船渡御に用いるのもいい。まつりごとを中心にすえ、その景色を再生産する。これなら生活の場で引き継ぐことが可能ですし、今となってはそれが木造船を将来に引き継ぎ、活かせるもっとも現実的で、夢のある道と思われれます。在地性の強い木造船建造の機会は今を置いてなく、先に猶予できるものではありません。未来に資するツボをおさえた製作記録をつくるのも現代の使命です。これらの企画や助言、記録調査の実践的支援をいたします。



図 兵庫県相生のペーロン
2007年5月27日

キーワード

木造船、船大工の技術継承、地域文化の創造、記録保存調査、出土船の鑑定

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究